

余命僅かの悪役令息に転生したけど、
攻略対象者達が何やら離してくれない5

シモン・
ロタール

フェリアルルの専属侍従。
文字通りの
一心同体。

リベラ

邪神とされている。
シモンと
ひんなことから
出会う。

マーテル

帝国の主神。
運命をつかさどる。

聖者

『聖者の薔薇園』の
主人公。強欲。だが、
表向きは誰よりも
優しい。

フェリアルル・
エーデルス

転生したら、『悪役令息』
だったと思っていたが、
実は……。たぐさんの
愛に囲まれて、
覚悟を決める。

ディラン・
エーデルス

フェリアルルの兄。無表情に
見えるが、フェリアルルを深く
愛している。この頃
悪夢ばかり見ている。

「今世は
フェリへの愛を、
絶対に奪わせない」

「みんなに

ひどいことする聖者、

許せない。だから、
僕が終わらせる」

「運命なんて関係ねえ。
俺らは俺らの意志で、
お前を愛してる」

ガイゼル・
エーデルス

ディランとは不仲だが、
フェリアルルへの愛は
一致している。

目次

余命僅かの悪役令息に転生したけど、
攻略対象者達が何やら離してくれない
5

番外編 ある日のティータイム

余命僅かの悪役令息に転生したけど、
攻略対象者達が何やら離してくれない5

プロローグ

両親や周囲の人間に冷遇され、僕は前世で誰にも愛されない人生を送った。

しかし短い人生の最期、突然トラックに轢かれて死んでしまい……そして、僕は転生した。生まれ変わった先は、ひっそりとはまっていたゲーム『聖者の薔薇園』の世界。

ここでは、主人公である聖者が帝国の救世主となる。そして彼は、攻略対象者達をはじめとした全ての人間からの愛情を思いのままにするのだ。

ゲーム内で悪役令息と呼ばれ嫌悪されるフェリアル・エーデルスに転生した僕は、前世に続いて全ての人間に嫌われ憎まれ、誰にも愛されない人生を再び送る——はずだった。

しかし、その運命に諦念を感じながら過ごしていく中で、なぜか、物語の運命は本来のものから大きく逸れ始めた。

弟を嫌悪する二人の兄、ディラン・エーデルスとガイゼル・エーデルスは弟想いの過保護な兄弟に。

世間を騒がせる悪役令息を憎む皇太子、レナード・クラウドイウスは、心優しい友人に。

全てを失い絶望に堕ちる大公子、ライネス・ヴィアスは、愛するものを守り抜く良き理解者

に——

ゲームとは全く違う、平穏で愛おしい悪役令息の人生。

けれど、ここは紛れもない『聖者の薔薇園』の世界なのだ。

いくら多くの運命が変わりつつあるとはいえ、物語のシナリオは運命に沿って確実に展開する。

ゲーム本編を三年後に控えた先日、ついに物語の中心である聖者が動き出した。

しかし妙なことに、聖者の印象はゲーム内での正義感溢れる優しい姿とは大きく異なっていた。

聖者はディラン兄様に強引な方法で接触し、恐ろしい力を行使したのだ。

それは洗脳とも呼べるような、相手を強制的に魅了してしまう力だった。

ディラン兄様はその力に一度屈しかけた。なんとか魅了に抗うことは出来たけれど、聖者に呪いを掛けられてしまい……僕はそれを解呪しようとしたけれど、聖者の圧倒的な力には敵わなかった。

ここは『聖者の薔薇園』の世界。主人公である聖者が常に絶対なのだ。

とはいえ、僕の愛する人達が不幸に苛まれる展開は見過ぎせない。

ゲーム通りのハッピーエンドが歪み始めた今、彼らを守るために、僕も動かなければいけない。

そのために、僕はシナリオに大きな変化を生んでいる原因を調べることにした。

本編がまだ先にもかかわらず、なぜか現れてゲームの登場人物達を苦しめようとしている主人公、聖者について。

ゲームと大きく異なる歪んだ運命、そしてその中心にいる聖者のことを調べるため、僕は帝国の歴史や神に関する文献を保有する魔塔を目標することになった。

第一章 魔塔からの手紙

ローズとの出会いやディラン兄様の事件を経て、僕はすぐに魔塔へ手紙を送った。

人嫌いで外部との交流を持たない、魔法研究に生涯を捧げる魔術師達の楽園……。魔塔とはそんな場所だと聞いていたから、正直良い返答は期待していなかった。

けれど予想とは裏腹に、魔塔は僕の手紙にすぐさま返事を送ってくれた。

手紙が送られてきたのは今朝のこと。

朝日が昇るころに、そっと僕の部屋に使用人が来て伝えてくれたのだ。

普段なら手紙は専属侍従のシモンに全て渡されているけれど、魔塔の封蝋がされている封筒を見て、緊急性が高いと判断されたみたい。

眠たい目をこすりながら、そっと封筒を開けると、内容は拍子抜けするほどの快諾だった。まるで僕からの手紙を待っていたかのような文言に、僕はとても驚いた。

事前にローズやシモンから聞いていた、陰鬱いんうつだのプライドが高いだのといったのとはかなりかけ離れている印象だ。

なんにせよ、無事に魔塔へ行けるのならなんでもいい。

僕は使用人から受け取った手紙を大事に抱え、わくわくしながらベッドへ向かった。

早くシモンにも手紙のことを伝えたいけれど、まだ朝が早すぎる。

眠って、起きてからシモンに見せよう——そう思っ、目を閉じた。

そしてしばらく経ち、僕は微かな気配を感じて目を覚ました。

部屋にはシモンが居た。昨日散らかしたままだったオモチャやぬいぐるみをお片づけしてくれていたみたい。

シモンは僕の気配に気づいて振り返ると、片づけの手を止めてにこやかに笑った。

今日も、濃い茶色にメッシュのような染めが施された髪がとても綺麗だ。

「おや。おはようございます、フェリアル様」

「おはようシモン」

枕元に置いていた手紙を持ち、シモンのもとへ駆け寄る。

「ねえねえ、シモン」

そわそわと身体を揺らすと、シモンはすぐに僕の様子に気付いてしゃがみ込んでくれた。

野性味のある美貌だけど、その微笑みはとても柔らかい。

「どうしました？ 何か良いものでも見つけましたか？」

両手を後ろに回している僕を見てそう思ったのだろう。

ふわりと笑うシモンに、僕はどどどやあと渾身のドヤ顔を浮かべて手紙を掲げた。

「えっへん。これは、なんでしょうーか」

「……？ はッ！ これは!？」

きょとんと首を傾げたシモンは、すぐに手紙の封蝋を見てぎょっと目を見開いた。

「この紋章は魔塔の!？」

シモンは手紙を受け取ると、すぐさま中身を読んでビシャーッと硬直する。しばらくしてようやく動き出したかと思えば、啞然とした表情でぼつりと呟いた。

「まさか、あの変人と呼ばれる魔塔主が、本当に部外者の立ち入りを許可するなんて……」

呆然とするシモンに、僕は二度目のドヤ顔を披露する。

「シモン、信じた？ 僕、すごい。やればできる子。えらい子なの」

どやどや、どやあ。

えっへんと胸を張る僕を見て、シモンは突然ふるふると震え始めた。

何やら静かに悶絶しながら、僕をぎゅっと抱き締める。無言で強く頬擦りされてちよっぴり困惑してしまった。

「シモン……？」

「どや顔フェリアル様可愛い！ 尊い！」

「むっ……こら、シモン！ ちがうでしょ、褒めるの！ 褒めて！」

「はッ！ す、すみません。あまりの破壊力について……」

僕がムッと不貞腐れてお説教すると、シモンはすぐにハッとして僕の頭を撫で回した。

「えらい、えらい！ フェリアル様はえらい子ですねえ。とっても天才です！」

「ふふん」

シモンの手でもみくちやにされながら、どやあ……と擬音が聞こえてきそうくらいのドヤ顔を再び披露する。

褒めるがよい、褒めるがよいぞー。

ふふんと調子に乗っていると、ふいに窓の方からコンコンとノックの音が聞こえてきた。

「む？」

シモンの肩越しに何事かと視線を向け、ぎょっと目を見開いた。

「ローズ……!？」

バルコニーに続くガラス扉をノックしていたのは、すっかり見慣れてしまった暗殺者だった。

淡い紫色の髪にローズマダーの瞳をしている彼の名前は、ローズ・シュタイン。

『聖者の薔薇園』の攻略対象者だけれど、今は僕の協力者だ。

扉じゃなくて窓からお邪魔する癖があり、加えて特にノックもせず無言で侵入してばかりのローズだけれど、最近是这样して扉をノックしてくれるようになった。

扉といってもバルコニーだし、気分じゃなければ今でも普通に窓から入ってくるけれど。

とはいえ、最近の成長が目覚ましいということは確かなので、僕はこの変化を喜ばしく思っている。

「シモン、ローズが遊びにきてくれたみたい」

「毎度のことながら、事前の連絡もなく無礼な人ですね」

「めっ。そんなこと言わないの」

呆れ顔で溜め息を吐くシモンに軽くお説教をする。

事前に来訪の報せを送るなんて、そんな常識的なことをローズがするわけじゃないか。まったくもう……とやれやれ言いながら歩き出す。

「たまにチクチクしたこと言っちゃうフェリアル様も可愛いですよねえ……」

何やら背後でシモンが悶絶している気配を察したけれど、今はそれよりもローズが優先なのでさっさとバルコニーへ向かった。

まだまだ寒い時期だし、早いところローズを中に入れてあげないと。

「ごめんねローズ、いま開けるからね」

凄腕の暗殺者である彼なら公爵家の邸宅とはいえこの鍵なんて余裕で開けられるだろうに、ローズはただジッと待ってくれていた。

鍵を開けると、ローズはいつもの無表情を微塵も崩さず、サッと部屋に足を踏み入れる。

「寒かった」

「ご、ごめんね！ ささっと開けられなくて、ごめんね！」

挨拶とかも特にない。

単に事実を述べるような、淡々とした呟きに慌てて謝罪する。

ローズが軽く頭を振ると、ライラック色の艶やかな髪から白い何かがはらはらと舞い落ちた。

外では雪が降っていたみたいだ。

「外は寒いから、今日の散歩は推奨しない」

突然そう切り出されて、きょとんと首を傾げる。ローズは今日もマイペースだ。

「うん？ そっか、そんなに寒いね。でも、運動はだいじだから」

「運動より健康だ。運動が原因で風邪でも引けば元も子もない」

「むーん……そ、それはそう……」

もつともな指摘に口を噤んだ。

散歩は毎日の日課だけれど、ローズにここまで言われてしまえば今日の散歩は中止にする他ない。考えてみれば散歩は邸内でも出来るし、まあいっかと早々に納得した。

ローズの服についた雪をぱっぱと払ってあげていると、ふと背後からシモンが近付いてきた。

「で？ アンタ何しに来たんですか。ただ世間話しに来たって柄でもないでしょうし」

そうだ。そういうえば、ローズの用件を聞いていなかった。

僕はローズを見上げて、首を傾げる。

「ローズ、なにかあった？ 困ったことあるなら、言って。僕も手伝う！」

「こらフェリアル様。他人にほいほい手を貸しちゃいけません」

勇ましく胸を張るけれど、すぐにシモンに窘められてしまった。しょんぼりと肩を落とす。

「で、でも、シモン。ローズはおともだちだよ。おともだち、助けなきゃ」

「お友達の前にコイツは暗殺者です。それでもってフェリアル様を殺そうとした前科があるんです。

そう簡単に絆されちゃダメですよ」

「ぐぬう……」

反論したいけれど、シモンの言葉は全て事実なので何も言えない……

ローズとの邂逅は、ローズが僕の命を狙ったことがきっかけだ。

僕が仲良しになったから、シモンは表面上ローズに対して強い敵意を向けることはない。

けれど例の件はシモンの中に、彼への消えない不信任を残したようで、表には出さないものの常にこうして警戒心を抱くようになっていく。

手をギュッと握り、僕はローズを見上げた。

「ごめんねローズ。あのね、シモンはね、ローズのことが嫌いなわけじゃないの」

「普通に嫌いですけど」

シモンにあつさり否定されてガーンと肩を落とす。

シモンったら。僕があわあわと情けないながらもフォローしてあげようとしたのに、そんな素っ気なく突き放すなんて。

でも、シモンのローズに対する警戒心は僕を想うが故のことだというのは分かっている。

だからシモンを強く叱ることは出来ない。これ以上のフォローは諦めて、僕はローズに再び「ごめんね……」と謝罪した。

「構わない。この侍従に嫌われようが好かれようがどうでもいい」

無表情でスンと語るローズに思わず脱力する。

シモンがぶんすかしながら「ほら！ やっぱ嫌いです！」と声を上げた。

二人は顔を合わせるといつもすぐに言い合いを始めるから、てっきり仲良しになったのかとほのぼのしていたけれど……どうやら単に相性が悪かっただけらしい。

「そんなことよりフェリアル。魔塔から手紙が届いただろう。返事はなんだ」

「へ？ ローズ、どうしてお手紙のこと知ってるの？」

そんなこと!? とぶんすかし続けているシモンを横目に尋ねる。

手紙は早朝に届いたばかりだ。

魔塔からのものだとは僕とシモンと、僕に手紙を渡してくれた使用人だけ。

それなのに、どうしてローズが手紙のことを知っているのだろう。

首を傾げると、ローズはなんてことなさそうにサラッと答えた。

「お前の動向は常に追っている。フェリアル宛てに誰がいつ手紙を送ったかなど、お前よりも早く把握出来る」

「ただのストーリーじゃないですか！」

シモンがカット目を見開いて叫ぶ。

ローズが居るとシモンがいつにも増して賑やかで嬉しいな。

「ストーリー？ 低俗な呼称はよせ。定常的な動向調査だ」

ローズが不服そうに訴えると、シモンはドシドシと地団駄を踏む勢いで苛立ちを露わにした。

「その簡単な単語をわざわざ回りくどいものに言い換えるヤツやめてください。無駄に思考のリリースが割かれて非効率なので」

「この程度で思考のリソースが無駄に割かれることはない。お前が賢くないだけだ」
「フェリアル様。コイツ影に沈めてもいいですか？」

いつもニコニコ笑顔でゆるふわなシモンが、今は額にビキビキと青筋を刻んで怒り狂っている。どうやら本当に二人は相性が悪いらしい。大好きな侍従と大事なお友達、仲良くなってくれば一番嬉しいけれど……この二人に関してはそれが叶うことはなさそうだ。

「だめだよ、シモン。なかよくね、なかよく」

絶対に無理だとは思っうけれど、一応忠告だけしておく。

僕はいじけて蹲るシモンの頭をよしよしと撫でながら、大きく脱線してしまった話を戻すべくローズの問いに答えた。

「えっと、お手紙の内容だよ。僕、魔塔に行けることになったよ。歓迎するよ、だって」

「魔塔からの手紙に歓迎という単語が記されていたのか？　なんらかの罠に違いない」
怪訝そうに即答したローズに苦笑する。

シモンの反応もそうだけれど、魔塔という場所はどことん陰鬱な環境として知られているようだ。確かに、ゲームでも魔塔は独特な立ち位置にあった。魔術師達は魔法以外に興味がなく、権力や名誉も欲さない。

人付き合いが苦手な者が多く、こうして外部の人間を『歓迎』するというのは、ローズの言う通りかなり不自然なのである。

とはいえ、流星に罠とまではいかないだろうけれど……確かに警戒はしておくべきかもしれない。

考えつつ、僕は口を開く。

「うん、ちょっと怪しいかも、だけど。でも、女神さまのこととか、呪いのこととか、きちんと調べたいから」

だから魔塔には必ず行く。

全ては、愛する人達のハッピーエンドのために。

「ローズも、聖者のこと知りたいでしょ？」

「……ああ」

聖者のことを口にする、常に無表情が貼り付けられているローズの顔が一瞬歪んだ。

ローズは、ゲーム内では『子供を絶対に殺さない暗殺者』だった。そんな彼は、聖者によって子供である僕を殺すように仕向けられたのだ。

家族を傷付けられ、信条に逆らうような殺しを強要された恨みはまだ残っているらしい。

いまやシモンや兄様達だけじゃなく、ローズも僕にとって大切な人達の一人。

ローズがそんな顔をしなくてもいいように、やっぱり魔塔で調べものをするのは僕に与えられた重要な任務だ。

「聖者、いいひとのはずなのに、悪いことしてる。謎がいっぱい。だから、調べなきゃ」

聖者……『聖者の薔薇園』における主人公。

つまり、この世界の主人公。絶対的で、神聖な存在。彼は本来、常に正義の側につくはずの間だ。

それなのに、こうしてこの世界に現れた主人公^{せいじや}は、なぜか悪役のような行動をしている。ゲームとはまったく異なる姿は、それだけで強烈な違和感を僕に与えた。

本編が始まる三年後までに……いや、聖者が再び大きく動き出すその時まで、なんとしてでも情報を集めないといけない。

そのためには……と、横で小さくなっているシモンの頭をもう一度撫でた。

「シモン。シモンも、ついてきてくれる？」

「当然です！　むしろ俺がついていけない選択肢なんてありませんよ！」

シモンが途端に元気になって顔を上げる。

一人じゃ心細いから、いつものようにシモンには傍にいてほしい。

そう言っただけで眉尻を下げると、シモンは何を当たり前のことをと言わんばかりに強く頷いた。その姿を見て、僕はへにや、と力の抜け切った緩い笑みを浮かべる。

「よかった。シモンが一緒なら、なんにもこわくないね」

シモンが「ぐはア!？」と呻いていつもの発作を起こすと同時に、静かに話を聞いていたローズがふと声を上げた。

「俺も行く」

淡々とした短い言葉にぱちくりと瞬く。

ローズが自分から意思を口にするのは珍しい。

しかも、僕達と行動を共にするなんて言葉を。

「ローズも、一緒に行きたいの？」

「ああ。魔術師共は陰湿でプライドが高いと聞く。たとえば魔塔に行つたところで対話の姿勢を見せないかもしれない」

「ふむ……」

「故に、俺が必要だろう。舐めた態度の魔術師は締め上げて、対話の席に着かせよう」

そ、それは対話とは呼べないのでは……

細身の魔術師を捻り上げて脅迫するローズの姿を想像する。

うーむ、完全に悪役である……

魔塔には協力を求めに行くのに、そんなことをしてしまえば逆に敵対してしまう。

あわあわと焦る僕の横で、呆れ顔のシモンがさらりと吐き捨てた。

「いや駄目に決まっているでしょう。フェリアル様の顔に泥を塗るつもりですか」

シモンにあつさり却下されると、ローズは不意を突かれたように瞬き、きょとんと首を傾げた。

「何故だ。妙案だろう」

「どこがですか」

寝言は寝て言え、とチクチク言葉が止まらないシモンをどうどうと宥める。

あまりよろしくない空気で睨み合う二人の間に入りつつ、僕は手紙に視線を落とした。

別になんてことなく、ただ内容をもう一度確認しようとしたのだが、その時ふいに手紙の端っこに小さな文章が記されていることに気付いた。

「……あれ？」

小さな声は二人の耳にも届いたらしい。

「フェリアル様？ どうしました？」

「何かあったか」

首を傾げる僕を見てシモンが心配そうに膝をつき、ローズは怪訝そうに眉を寄せる。僕はちよつぱり気まずい気持ちになりながらも、二人に手紙を掲げてみせた。

「あ、あのね……ここにね、注意書きがあるの」

「注意書き？」

シモンが僕の手から手紙を抜き取り、僕の示した箇所を目を通す。

しばらくするとぷつと笑って、さっきの僕みたいにローズへ手紙を掲げた。

「『暗殺者は魔塔への立ち入りを禁ず』ですってよ」

「あ？」

ローズがシモンから手紙をひったくる。

目を凝らしてそれを読むと、やがてローズの無表情は険しいものに歪んでしまった。

「……何故だ」

「まあ妥当ですよね！」

「何故、俺の正体がバレている」

「重要なところそこですか」

ぐぬぬ……と顔を顰めるローズの疑問はもつともだ。

ローズの、いや、シュタイン伯爵の正体を知る者は少ない。裏の仕事をするローズは、情報を制することに誰よりも優れている。

ローズをシュタイン伯爵と認識せずにこの文章を記したのならまだしも、そうでないとすれば……本格的に、魔塔は侮れない組織かもしれない。

「なんにせよ魔塔から拒否されてしまえばあなたに選択権はない。残念ですが留守番ですね」
まったく残念じゃなさそうなニマニマ笑顔でシモンが語る。

ローズはちよつぱり不満げながらも、そういうことなら仕方ないと溜め息を吐いた。

「己の手で聖者の情報を探りたかったのだが」

「大丈夫だよ、ローズ。僕がかわりに調べ物ががんばってくるから、安心して」

ふんすと息巻き、落ち込むローズを励ます。

ローズは無表情をほんの少しだけ崩し、小さく「安心は出来ない」と呟いた。

失礼である。

「……分かった。魔塔での調査はフェリアルに任せる。俺は学園を監視しよう」

お仕事を任されてしまった、とドヤドヤするのも束の間、ローズのセリフが気になった。

「学園を監視？ どうして？」

まさか、学園の関係者を標的にした任務でもあるのだろうか。

ローズのことは信頼しているけれど、ちよつぱり疑心を抱いてジト目を向けてしまう。

僕の心中を察したらしいローズは首を横に振り、淡白に答えた。

「お前の兄に助力する。聖者は解呪のために近いうちに現れるのだろう」

その言葉を聞いてハッとした。

そうだ、そのことがすっかり頭から抜け落ちていた。

聖者はディラン兄様に魅了を施すため、わざと酷い呪いをかけた。自らかけた呪いを自らの手で解き、ディラン兄様を魅了するためだという。

まるで、悪役に害された登場人物を主人公が救うシナリオを、たった一人でなぞるかのよう。ライネスはそれを自作自演の信仰心集めと呼んでいたけれど、その推測はたぶん正しい。

聖者の思惑を推し量ると、そろそろディラン兄様の呪いを解くために聖者が学園に現れる頃合いだろう。

「ローズ。ディラン兄様のこと、守ってくれるの？」

「当然だ。俺にはその義務がある」

義務、という言い方がローズらしい。

ローズは感情に疎くて、罪悪感という気持ちを最近まで理解出来ていなかった。

けれど僕から見れば、ローズがディラン兄様の件で負い目を感じているのは明らかだ。今日だって、こうして会いに来てくれたのはディラン兄様の件での責任を強く感じているからだろう。

「ありがとう、ローズ」

僕がお礼を言うと、ローズは不思議そうに首を傾げた。

「礼を言われる筋合いはない」

突き放すような言い方だけれど、これがローズなりの誠意を込めた言い方だということを僕はもう知っている。

ふにやふにやと笑う僕の横で、シモンは険悪な表情を浮かべているけれど。

「チクチク言葉やめてください！ フェリアル様にはふわふわ言葉で接してください！」

「面倒な対応を強要するな」

「面倒とは何事ですか！ うちのフェリアル様は繊細なんですよ！」

またもやシモンがローズに嘔み付き始めたので、言い争いの気配を察して慌てて間に入る。

「シモン、落ちついて。ローズの言葉はね、シュークリームなんだよ」

「……シュークリーム、ですか？」

流石のシモンもこの喩えをすぐに理解するのは難しかったようだ。

ローズに向けていた勢いを消して、ぱちくりと瞬く。

僕はこくこくと頷き、脳内でシュークリームを想像しながら説明してあげた。

「外はカリッと、中はふわふわなのだよ」

えっほんと胸を張りつつ言うと、シモンは後ろ向きにばたんと床に倒れた。

「不意打ちの天使ムーヴ……」

「しもーん！」

安らかな表情で鼻血を噴き出し姿勢良く倒れるシモンにヒシッ！ と縋り付く。

「なんの茶番だ」

ローズは傍らで困惑の表情を浮かべていた。

【聖者再来】（ガイゼルside）

ディランが聖者に呪いをかけられて、早くも数日が経った。

その間、ディランは不定期に訪れる激痛に苦しんだ。まともに授業に出ることも出来ず、あの日以来ほぼ毎日寮から出られないでいる。

だがこの馬鹿は試験が近いからと這ってでも登校しようとするもんだから、その度に俺が多少の脅しを吐きながら引き留める……その繰り返しだ。

そして、それは今日も今日とて同じだった。

朝、ディランの部屋のドアを開く。

中へ入ると、案の定ディランは登校しようとしていた。

しばらくは休養しろとあればと言ったのに、俺の苦言を聞く気は微塵もないらしい。

「おいディラン、毎回言ってるが大人しくしてろ。お前に万が一のことがあればチビが悲しむぞ」いつものセリフを聞かせると、案の定ディランは部屋の扉に伸ばしていた手を寸前で止めた。

「……その脅しはやめろと言っているだろ」

ディランが顔を顰めて振り返る。

その顔を見て得意になるのも、ここ最近の日課になりかけていた。

「実際効くんだからやめるわけねえだろ」

こういう時にチビの存在をチラつかせるのは強い。

その脅し文句がこれ以上ないほど効くということを、俺はよく知っている。

なぜなら、俺も同じだからだ。そして俺がそうだということは、必然的に片割れのコイツも同じ。かなり不服だが、俺とディランはどこまでも芯が似通っているのだ。正反対だなんだと言われるが、根っこの部分が同じなら表面的な違いはあまり意味を成さない。

どちらも、中心の最も重要な部分にチビがいる。

フェリアル……それが俺達の逆鱗。

逆鱗が同じならば、思考も自ずと似通う。

「……お前の言い分は理解している」

ご丁寧にきっちり制服に着替え済みのディランが、ふと複雑な表情で俯いた。

その様子に溜め息を吐く。

何が言いたいか、なんとなく察することが出来るからこそ、その先のセリフを聞きたくない。

「理解してんなら、今すぐ戻れ。で、大人しく寝ろ」

ディランの首根っこを掴んで、部屋へと引き戻す。

不服そうな顔で抵抗するディランだが、コイツが腕力で俺に敵うことはない。俺は容赦なくディ

ランを引き摺ると、半ば放り投げるようにベッドへ戻した。

「俺は健康だ」

「ああそうだな。ただ呪いを刻まれてるだけの健康体だ。見りゃ分かる」

ムスツと不貞腐れるディランの前で、腕を組んで仁王立ちする。

ディランのこういうところは昔から変わらない。脳みそだけは大人顔負けに賢く成長し続ける一方だが、単純な力勝負となると俺に勝つことは出来ない。

それが悔しいようで、時折こうしてガキくさい顔を見せる。チビには絶対に見せない顔だ。

そう、コイツは昔から強がる癖があった。今だってそうだ。

「……お前、昨日も呪いが発動したんだろ。顔色悪いぜ、あとその隈もみつともねえ」

淡々と指摘すると、ディランは得意の無表情を驚いたように崩した。

何を驚くことがあるのか。俺達は双子で、互いを互いよりも理解している。この程度のことに俺が気付かないとでも思ったのか。

「おいディラン。俺を騙せると思うな」

釘を刺すように忠告する。

ディランは僅かに肩を揺らして、そして諦めたように力を抜いた。

「……本当は、まだ痛い」

ぼつりとした呟きは、まるで小石を蹴るように零された。

脇腹を片手で撫でながら、ディランは語る。正直に痛みを吐露する姿を見たのは幼少期以来だ。

それだけ、ディランが苦しんでいるという証拠なのだろう。

「そうか」

短く言葉を返し、近くの椅子を引っ張ってきてディランの正面に置く。

そこに腰掛け、小さく息を吐いた。こうしてディランと正面から語り合うのもいつ以来だろうか。

「そんなに痛むのに、なんで無理して授業に出ようとすんだよ。俺なら喜んで休暇を謳歌するぜ」

勉強なんて煩わしいだけで、出来ることなら投げ出してしまいたいと常に思っている。

それは俺だけじゃない。こういう年頃の奴らなら誰だって思う。

それなのに、ディランは違う。ディランはいつだって馬鹿真面目で、正しい人間なのだ。

まるで、正しくあり続けようとしているかのように。

「……ガイゼル。お前、夢を見るか」

俺の質問に答えたとは思えない、突然の問いに首を傾げる。

急になんだ。

そう返そうとすると、ディランは答えを急かすように光のない瞳をこちらに向けた。

それを見て、茶化しを含んだ全ての答えが候補から消える。ディランの瞳は、面白みのない真実

の返答しか許さないと告げていた。

「いや……別に、あんま見ねえけど。なんでそんなこと聞くんだよ」

ディランが僅かに目を伏せる。表情がよく見えなくなつて、それがなぜだか不安を煽った。

嫌な警鐘が小さく、だが確実に鳴り始める。

「俺は、最近夢を見る。いや……本当は、ずっと昔から夢を見ていた。目覚めた後、はつきりと覚えているようになったのは、最近だというだけだ」

ふと気が付いた。ディランの手が震えている。その震えから読み取れる感情は、恐怖だ。

ディランは今、何かに怯えているらしい。

「昔から、妙に生々しい悪夢が苦手だった。夢の中の俺は、最悪で、低俗で、見るに堪えない。俺は、あんな姿に成長したくなくて、だから、正しく在ろうとした」

それはまるで独白のようで、なぜだか聞き入ってしまう。

単なる悪夢の話だ。子供だましのような、ただの思ひ出話に過ぎない。

それなのに、なぜディランはこれほど怯えているのか。なぜ、いつもは澄ましたカーマイン色の瞳に、柄にもない恐怖の色が滲んでいるのか。

「俺は、フェリを愛している。だが悪夢の中の俺は、フェリを愛していなかった」

ディランの口からそんな言葉を聞いたのが、なぜか少しショックだった。単なる夢の話なのに。

チビ第一で、いつでもチビが最優先で、鬱陶しいほどにチビを愛している。

そんなディランが、たとえ夢の中だとしてもチビを愛さなかった時があったことに、俺はある種の失望を抱いたのかもしれない。

「……そりゃ、夢の話だろ。なにビビってんだよ。そんなクソみてえな夢、さっさと忘れちまえ」吐き捨てるように言うが、ディランはなぜか首を横に振った。

「あの日から、いつも考える。あの時もしも、魅了が確実に効いていたら……ガイゼル、俺はどうなっていたと思う」

掠れた声で尋ねられる。その問いに息を吞でしまったのは、俺も考えてしまったからだ。

恐らく、ディランが今考えていることと全く同じ、最悪の光景を。

「……馬鹿か。お前がチビを愛さないわけがねえ」

そんな未来は起こり得ない。ディランの愛の重さは俺が一番よく分かっている。

あの馬鹿げた魅了がもしも完璧に効いていたら。そんなこと、考えるだけ無駄だ。

そう一蹴しようとすると、ディランがふと背を丸めて俯いた。いつもの凜とした姿とは大違いの、いつそ無様とすら言える姿に息を吞む。

「ガイゼル……頼む、頼むから」

ディランらしくない弱々しい声。

普段はうざったいだけの飄々とした態度へと、なぜか今は早く戻ってほしいと思った。

「俺が見たものをただの悪夢だと言ってくれ」

悲痛な、訴えるような声だった。

悪夢は所詮悪夢だ。

夢なんて、誰でも見る。

ディランもよくある悪夢を見ただけに過ぎない。

そう言ってやればいい。柄にもなくガキのように悪夢に怯えているコイツを、いつものように笑

い飛ばしてやればいい。

何を馬鹿げたことを、お前もまだまだガキだな。そんなことを言つて、嘲笑つてやればいいのに。

「……それは」

それはただの悪夢だ。

どうして、その一言が紡げない？

なぜ、俺は躊躇^{ためら}っているんだ。どうして今、俺の脳内にも悪夢の記憶が蘇るんだ。

悪夢なんて誰でも見る。俺だって、昔から悪夢なんて定期的に見ていた。それは決まって最悪な夢で、俺はチビを突き放して、そして最後は……

いや、だからなんだ。

悪夢は、当人にとつて最悪の、だが決して起こり得ない光景を見るからこそ悪夢なのだ。

現実には関係ない。関係ないはずなのに。

それでも俺の唇は動かない。

黙ったままでいると、ディランが低く呟いた。

「……お前も、見たんだろう」

その問いにどんな答えを返すのが正解か分からなくて、視界がぐらぐらと揺れる。

ディランが妙な話をしやがるから、俺までおかしなことを思い出してしまった。

夢の話だ。

その中の自分は最悪で、低俗で、見るに堪えない。チビを突き放し、チビを愛さず……

いくら双子で芯が同じとはいえ、悪夢の内容まで似通うことがあるか？

思い出したくもない記憶に襲われそうになった時、ディランの小さな声が部屋の中に嫌に響いた。

「聖者に呪われたあの日から、目覚めた後も悪夢の記憶が鮮明に残るようになった」

俯きがちな片割れの表情は、相変わらずよく見えない。だが、そこに仄暗い色が滲んでいることだけは見なくても分かった。

「あれから、思う。もしかすると、今まで見てきた悪夢は、夢ではなくて——」

「ッ、ディラン！」

咄嗟に叫ぶ。ディランはハツとしたように肩を揺らし、そして口を閉ざした。

自分でも、なぜその言葉の先を遮つたのかよく分からない。だが、その先を聞いてはいけないと聞けば何かが終わってしまうと、そんな予感だけが確かにあった。

「……しっかりしろよ。お前がそんな情けねえこと考えるようになったのは、聖者の野郎がお前を呪つてからだろ？ きつと聖者がお前に何かしたんだ、呪い以外にも、何か」

ディランが不安定なもの、聖者の策略か何かに違いない。

悪夢は関係ない。そうだろ？

「……ああ、そうだな」

ディランが小さく頷く。その様子を見て柄にもなく安堵した。

こんな話は早くやめにして、俺はさっさと校舎へ向かうべきか。

「とにかく……今日も大人しく寝てろよ。いつ聖者がまた仕掛けてくるか分からねえんだ」

ディランの答えを待たず、勢いに任せて立ち上がる。

部屋を出ようとすると、その前に扉が開いて見慣れたデブ猫が入ってきた。

人間を油断させるためにわざと猫の姿をしている、ディランの嫌味な使い魔のミアだ。

「ご主人様、客が来たみゃ」

「あ？ 客って誰だ」

「む？ お前まだいたのかみゃ？ お前はさっさと学校行けみゃ」

空気を読まず突然入ってきたかと思えば、このデブ猫は相変わらず傲岸不遜で気に食わない。

ゆらゆらと揺れるムカつく尻尾を掴み上げると、ミアはシャーツと毛を逆立てて威嚇してきた。

「離しやがれたみゃ！ いつもいつも乱暴でムカつくみゃ！ ミアはお前が嫌いだみゃ！」

「俺だってテメエが嫌いだクソ猫。仮にも猫の形してんならもつと猫らしく可愛げ見せろや」

「いまだき古臭い考えはやめるみゃ！ 可愛げない猫が存在してもいいだろだみゃ！」

でもミアは可愛いみゃ！ と喚き散らすデブ猫をぼいっと放り捨てる。

その時、ふと声が聞こえた。

「おや、また猫と喧嘩ですか？ ガイゼル」

思わず「げっ」と苦い顔をする。

ちょうどミアがぼてつと落下した辺りに立っていたのは、胡散臭い笑みを顔に貼り付けた皇太子、レナード・クラウディウスだった。

「お前……人様の部屋だぞ、勝手に入ってくんな」

拗ねた様子でぼてぼてと出て行くミアを見送りつつ、すれ違いで入ってきた皇太子に吐き捨てる。

「君ではなくディランの部屋でしょう。君の方こそ我が物顔が過ぎるのでは？」

ズカズカと入りこんできた皇太子が、ディランに「お邪魔しますよ」とにこやかに声をかける。

特に苦言を呈することなく頷いたディランに溜め息を吐いた。

お前もお前でそれでいいのかよ。

「で？ 何しに来たんだよ」

一応、皇太子は生徒会長という立場で、普段は優等生を装っている。

授業も基本的にサボることはない。

だというのに、なんだってこんな所で油を売っているのか。そろそろ授業開始の鐘の鳴る時間だというのに。

聞くと、皇太子はきよとした表情になった。

「何しにつて……ディランを迎えに来たのですよ」

「は？」

予想外の答えに目を見開く。

ディランが呪いのせいで激痛に耐えていることは、皇太子も当然知っている。こうして休ませてやることに賛成してはいたはずだ。

だというのに一体何を言い出すんだ、コイツは。

「おい、ディランは……」

「ええ知っていますよ。呪いのせいで動くのもままならないでしょう」
分かっているなら冗談はよせ、と顔を顰める。

くだらない冗談を言うのは皇太子らしくない。何を考えているのかと睨みつけると、皇太子は肩を竦めて言った。

「そろそろ呪いを解きませんか？ 私も苦しむディランをこれ以上見たくないのです」

困ったような微笑に、思わず強張っていた身体から力が抜ける。

そのセリフに嘘は見えない。俺が黙り込むと、皇太子はディランに真剣な表情を向けた。

「ディラン、君が良く思わないのは分かっています。ですが、まずは呪いを解くことが優先です」

ディランは何やら複雑そうな表情を浮かべている。

皇太子が何を言いたいかはなんとなく理解出来た。解呪のことは、俺だっと思って考えていたから。

「……聖者に解呪させるために、表に出ろって言いたいのか？」

俺が尋ねると、皇太子は静かに頷いた。

「ええ、その通りです。聖者の目的は大衆に己の力を見せつけること。ディランが表に出るまで、恐らく聖者は現れません」

その指摘はもつともだ。

信仰心を集めようとしているらしい聖者にとつて、ひっそりとディランの呪いを解くメリットはない。奴の目的はあくまで大衆を魅了すること。

きっとディランが表に出れば、すぐにでも姿を見せてわざとらしく神々しい解呪を施すはずだ。

だが、ディランはそれを受け入れないだろう。

「殿下、俺は生徒達が集まる場所へ行くつもりはありません。ただ授業を欠席したくないだけです」

ディランが眉を寄せて言う。

ディランの複雑な心情は理解できる。常に正しく在り続けるディランは、授業をサボるしかないこの状況を、内心もどかしく思っているのだろう。

だからこうして無理にでも登校しようとしているのだろうが、そうは言っても大勢の前に姿を現すのも不安なはずだ。

「……俺の解呪と引き換えに、大多数の生徒が聖者に洗脳されることになりますよ」

ディランの低い呟きには、悔しさや葛藤といった複雑な色が滲んでいる。

それもそのはずだ。ディランからすれば、この状況で表に出るといふ行動は聖者に屈するも同然。大勢の生徒達を代償にするのが分かっているノコノコと聖者に姿を見せるなど、屈辱以外の何物でもない。

ふと、皇太子が不思議そうに首を傾げた。

「だから、どうしたと言うのです？」

想定外の返答にぎよっとする俺と同様、ディランも驚いた様子で固まった。

その答えは皇太子としてあるまじきものだ。普段のコイツなら、躊躇うことなく少数より多数を選ばず。

言ってしまったば、この呪いはただ苦しめるためのもので、呪いの激痛によってディランは死ぬことはない。

つまり、ディランが呪いに耐えていれば他の誰にも悪影響が及ぶことはないのだ。

「おい、分かってんのか？ これは優先順位の問題だ。お前の得意なヤツだろ」

ついにおかしくなったかと顔を顰める俺に、皇太子はまたもやばちくりと瞬いた。

「ええ。ですから、どうでもいいでしょう。優先順位で言えば、ディランは大衆よりも上にある」
ぽかんと目も口も開き切ったのは、ディランと同じタイミングだった。

哑然とする俺達が何を考えているのか察したのか、皇太子は真面目な顔をほんの微かに赤く染めてそっぽを向いた。

「魅了は聖者を倒せばどうとでもなりますが、痛みを伴う呪いは対処の優先度が高い。それだけのことですよ」

早口で言い切ると、皇太子は若干染まった顔を隠すように素早く踵を返した。

「とにかく、さっさと行きますよ。ディラン、いいから君も来なさい」

顎をクイツと動かすと、それだけ吐き捨てて皇太子は部屋を出て行った。

「……」

「あー……」

未だに硬直したままのディランより先に我に返る。

「そんじゃ、まあ……行くか？」

まだ少し複雑な表情を残しつつも、皇太子の勢いに押されたのかディランは大人しく頷いた。

俺と皇太子でディランを挟むようにして登校する。

ちようど生徒達の登校が活気づく朝の時間帯だ。校舎前には大勢の生徒がいた。

鬱陶しいことこの上ないが、俺とディランは学園でかなり目立つ。ついでに誰もが知る生徒会長である皇太子も一緒となれば、向けられる注目は普段よりも桁違いだった。

「……頭痛が悪化しそうだ」

「我慢しろ。聖者を誘き寄せて解呪した後は、いくらでも仮病でつち上げて休ませてやる」

遠巻きだが喧しく騒ぐ連中のせいで、ただでさえ体調が最悪なディランに追い打ちがかけられる。あからさまに顔を顰める俺達の横で、皇太子は相変わらず仮面のような笑みを浮かべて周囲に挨拶を返していた。

毎度のことながらよくやる奴だ。

「聖者は本当に現れるのか」

ディランが疲弊した様子で呟く。その時だった。

ふと皇太子が立ち止まる。怪訝そうに首を傾げる姿に、俺とディランもつられて立ち止まった。

「おい、どうした？」

「……匂いが」

「匂い？」

皇太子が辺りを軽く見渡ししながら、何やら匂いを嗅ぐ様子を見せる。

コイツが犬のように匂いを気にし始めるのは、いつも決まって良くないことが起こる前触れだった。

生まれつき突出した嗅覚を持つ皇太子は、この世のあらゆるものを『匂い』として認識することが出来る。

紅茶に仕込まれた毒の匂い、個人によって変化する独特な体臭、果ては魔力や魂の匂いまで。

皇太子がこうして表情を険しくするのは、感じた匂いが良くないものだった時だけだ。

「客が来たようです」

深い溜め息と同時に皇太子は空を見上げる。

雲一つない青空にどこからともなく光が集まって、学園のちょうど真上に光り輝く球体が現れた。その球体が、まるで卵が割れるかのように裂けると、中からチビと同一年ほどのガキが姿を見せた。

儚い純白の髪に、鮮やかな色彩の瞳。見目だけなら神殿の壁にでも描かれていそうな印象だ。

「……派手な登場だ」

ディランが面倒くさそうに吐き捨てる。

周囲の興奮したようなざわめきとは裏腹に、俺達の表情だけは揃って抜け落ちていた。

「まるで宗教画の光景を目の当たり^{*}にしているようですね」

「そうだな。帝国の馬鹿げた聖者崇拜が続けば、この光景も百年後に絵画として残るだろうよ」

俺の嫌味に皇太子は気まずそうに肩を竦めた。

「私が皇帝になった次代からは、無神論者を育てます」

皇太子がヤケを起こすように吐き捨てる。

ディランと顔を見合わせて少し笑いが零れた。

「殿下は聖者を崇拜なさっていたのでは？ それに残念ながら神は存在します」

「さらに残念なことに、神は心優しい救世主ってわけじゃないらしいぜ。女神崇拜の殿下？」

幼少期、女神を慕って神殿に入り浸っていた皇太子を思い返す。

その過去については当然自分でも覚えているようで、皇太子は恥じるように首を振った。

「ああもう、やめてください！ ほら、聖者が降りてきますよ」

無理やり話を逸らすと、皇太子は空を指さした。その先には、確かにゆっくりと舞い降りてくる聖者の姿がある。

白い装束のようなものを纏った聖者は、まっすぐディランの目の前に降りてきた。

「——やあ、ディラン」

聖者が微笑む。あんな事件がなければ、神々しさしか感じなかっただろう完璧な笑顔だ。

学園中の人間達の視線が、光の中から降臨した聖者に向けられている。ほぼ全員が、まるで一目惚れでもしたかのように頬を赤く染めていた。

「あの美しい少年はなんだ？」

「神の遣いに違いない！」

馬鹿げたざわめきが嫌でも耳に届く。

逆光を背負って地上に降臨した姿は、確かにそれだけ見れば天使が現れたかのようなだった。俺達の目にはただの茶番にしか映らなかったが。

聖者は胸の前で手を組み合わせ、切々と述べる。

「酷い呪いに耐えたみたいだね。でも僕が来たからにはもう大丈夫だよ！」

「……」

ディランがあらさまに嫌な顔をしていることに、どうやら聖者は気が付いていないらしい。

「ディランの呪いは僕が――女神マーテルの愛し子であるこの僕、聖者アベルが解くからね！」

声高らかに宣言すると、聖者は手のひらを勢いよく天に掲げた。

まるで神が祝福するかのように、空から眩い光が降り注ぐ。

ディランの姿が一瞬光の中に隠れて、俺は慌ててその光に手を伸ばした。

「ディラン！」

かろうじて掴んだ肩を思い切り引き寄せる。

後ろ向きに倒れ込んだディランを受け止め、柄にもなく焦燥しながら顔を覗き込んだ。

「おい、大丈夫か!？」

「ああ……平気だ」

ディランは何度か瞬くと、やがて自分の身体を見下ろしてぼつりと呟いた。

「痛みが引いた」

その言葉を聞いて、思わず皇太子と顔を見合わせる。

息を呑む皇太子もどうやらすぐに状況を察したらしい。振り返ると、視線の先には得意気に笑う

聖者の姿があった。再び宙に浮かんでいる。

「言ったでしょ？ 僕は聖者だ、呪いを解くなんて簡単なことさ」

聖者のセリフはやけに鮮明に響き渡った。

それを聞いた周囲の生徒達はたちまち歓声を上げ、聖者はそんな大衆の注目を一身に浴びる。

突然空からガキが現れて、そいつがこれまた突然ディランの呪いを解いた。どう見ても違和感しかない不自然な展開だというのに、周りの奴らは神でも崇めるかのような熱烈な反応を見せている。

「……これが例の魅了か」

忌々しく思いながら吐き捨てる。

魅了という力は、姿を現し、聖者としての力を見せつけるだけでこれほどの威力を発揮するのか。

恐らくディランの件で聖者への耐性を付けていなければ、俺達も周りの奴らのように今頃聖者を

崇めていただろう。

考えるだけでもゾッとする。

そこで、ふと聖者が俺達を振り向いた。

「あれ？ おかしいな。どうして三人には効いていないんだろう」

周囲から上がる「聖者さま万歳！」「女神さま万歳！」という狂気じみた歓声を満足げに聞いていればよかつたものを、聖者は不思議そうな表情になった。

再び正面に降り立とうとする聖者を警戒し、ディランと皇太子を背後に隠すように前へ出る。

「ガイゼル……！」

「下がってる皇太子。お前が魅了されりゃ俺達は終わりだ」

躊躇うことなく剣を抜き、その切っ先を聖者に突き付ける。

皇太子が聖者の魅了に堕ちたとしたら、それは皇族の陥落を意味する。

皇族の中でも特に影響力の強い皇太子が聖者の意のままになれば、聖者は帝国すらも思うがままに操れるようになってしまうだろう。

俺が剣を抜いたのを見て、周囲から悲鳴が上がるかと思っただが、誰も声を上げなかった。よく見ると濁った瞳で、聖者への賛美を零し続けている。

ゆっくりと地上に降り立った聖者は、底の見えない虹色の瞳でこちらを射貫いた。

「……へえ。今回は本当に狂っつて、みえた。あのガイゼルが僕に武器を向けるなんて」

まるで真意が見えず、実力も計り知れない。騎士の端くれとして相手の力を見定める目には長^たけている方だが、これほど底が知れない敵は初めてだ。

「おい。テメエ、気安く俺の名を呼ぶんじゃない」

ガキの姿をしていようと容赦しない。

コイツはチビを殺そうとして、ディランには悪趣味な呪いを刻み付けた。

帝国の騎士道はガキに剣を向けることを許さないが、俺は違う。相手がなんだろうと、第一に身内を傷付けた者を許しはしない。

そう決めて、俺は高らかに吼える。

「聖者、テメエは一体なんなんだ？ 舐めたこと吐きやがったら殺すぞ」

原則、学園内で剣を抜くことは禁じられている。

聖者に向かって剣を向ける俺の姿は、本来であれば酷い問題行動として周囲の目に映るだろう。だがどうだ。学園の馬鹿共は今、聖者と女神への信仰を叫び続けている。この異常事態を正しく視認出来ているのは俺達だけらしい。

こんなことを仕出させるこのガキは、一体なんなんだ。

「なについて」

聖者の表情が抜け落ちる。

まっすぐに俺達を指さすと、聖者は不思議そうに瞬いた。

「お前達こそ、なんなの？」

「……あ？」

「たかが神の創造物にしか過ぎないくせに、自我が発達しすぎだよ」

ふと聖者の瞳が七色に煌^{きら}めく。

なぜかその鮮やかな色彩から目を離せなくなつて、鼓動が嫌な音を立てた。それと同時に、頭がぼんやりと霞みがかってくる。

——ガシャンッ!

身体から力が抜け、握っていた剣が地面に落ちる。

その瞬間、背後からディランの焦ったような声が届いた。

「ガイゼル! 奴の目を見るな!」

片割れの切羽詰まった声にハッとする前に、突如強い力で首根っこを引っ掴まれた。

「ぐッ……!? なッ、んだよ!」

突然の息苦しさによつて半ば強引に我に返る。

今のはディランか、皇太子か。なんにせよ一言文句を言ってやらないと気が済まない、と振り返った先には、これっぽっちも見覚えのない一人の男が立っていた。

そのさらに後ろには、突如現れた謎の男を見てばかりと瞬くディランと皇太子が居る。

瞬間的に、俺は謎の男を睨みつけた。

「誰だ、テメエ」

全身黒ずくめのその男は、ライラック色の髪を靡かせて異様な空気を纏い佇んでいた。

一切の感情が読めない無表情がやけに印象的だ。

「お前も下がっている、ガキ」

「あア!? 誰がガキだ!」

急に現れたと思えばなんて失礼な野郎だ。

勢いに任せてぶん殴ってやろうと思ったが、腕を捻り上げられて男の背後に放り投げられた。

「いッてえッ!」

途轍もない馬鹿力だ。捻られた腕がジンジンと痛み、俺は情けなく膝をついた。

コイツは何者なんだ? 突っ立ったまま俺を捻じ伏せるなんてバケモンとしか思えねえ。

困惑していると、聖者が眉を吊り上げて淡々と語る。

「へえ、お前もバグか。あの時ガキ共と一緒に殺しておけばよかったかな」

どうやらこの男は聖者と面識があるらしい。しかしどうやら親しい間柄というわけではなさそうで、男は聖者のセリフを受けると微かに無表情を歪めた。

男は何も言わず、黒いケープの下から音もなくナイフを取り出す。

その隙のない動作と、前髪から覗くローズマダー色の瞳を見て思わず息を呑んだ。

どこことなく既視感を抱くと思えば、そうだ。俺はこの男を知っている。この男というよりは、この特徴を持った人間を知っている、と言った方が正しいが——

「彼はまさか……あの暗殺者では?」

皇太子が驚いたように小声で語る。

どうやら勘付いたのは俺だけじゃないらしい。

鮮血を連想させるローズマダー色の瞳、全身黒ずくめの恰好、鋭く研がれたナイフ。

この男は帝国中を震撼させた稀代の殺人鬼——『帝国の闇』だ。

「僕を殺す? 無茶言わないでよ、君は子供を殺せないでしょ?」

聖者が嘲笑うように言葉を返す。

その直後、ふいに男が片手に持っていたナイフを容赦なく聖者へ投げ付けた。
俺達が息を呑む間もなく、まるで矢のように飛んだナイフは聖者の目前でピタリと止まる。
まるでそこだけ時が止まったかのようだ。静止したナイフは、数秒後にカランと虚しい音を立てて地面へ落ちた。

「……ふうん、信条も覆すか。お前も間違いないくバグの一つみたいだね」

聖者が酷く冷淡な声音でそう言うと、虹色の瞳が再び嫌な煌めきを宿した。

脳内がぐらりと歪むような、あの不快な感覚が再び襲いかかってくる。ついさっきそれに支配されかけたばかりだから、今度はすぐに聖者から視線を逸らした。

「おい！ アイツの目を見るな……」って、うおッ!」

前に立っていた男にも忠告しようと声を上げた直後、ふと男に担ぎ上げられてギョツとした。

「……あの目は厄介だな」

「おいテメエ!? 気安く触れるんじゃない!」

「耳元で喚くな、喧しい」

ギャーギャー叫びながら暴れるが、男の腕はビクともしない。

男は細身の体躯の一体どこにそれほどの馬鹿力を隠していたのか、俺だけじゃなくディランをも同時に抱えて後方に走り出した。

「この俺を抱えながら澄ました顔しやがって……!」

「フェリには絶対に見られたくない……」

皇太子が明らかに困惑した様子を見せながら、男を見る。

それを一瞥した男は、無表情を一切崩さずサラッと言い放った。

「お前は走れ、皇太子」

「私を皇族と知っていてその扱いですか……?」

男に淡々と命じられると、皇太子は困り顔をしつつも素直に走り続けた。

いつも飄々と優雅に歩く姿からは想像もつかない。この場に皇太子の護衛騎士がいれば、あの黒いフェイスベールの下で静かに爆笑していたことだろう。

つか、そーいやあの変態はどこでサボってやがるんだ。皇太子の危機だろうが。

「この状況は分が悪い。一旦退くぞ、ガキ共」

だから誰がガキだ、と内心悪態を吐きながらも、担がれた姿勢で振り返る。

聖者は俺達を追うことはせず、ただジッと感情の読めない瞳を向け続けていた。

あれから校舎へは行かず、俺達はそのまま寮へと戻ってきた。

ディランの部屋に駆け込んだ後、初めに声を上げたのは皇太子だった。

「それで、なぜ名の知れた暗殺者が私達を助けたのです?」

俺とディランを担いでここまで走ってきたというのに、男は息切れ一つしていない。

ただ身一つで駆けた皇太子は壁に寄り掛かって座り込んでいるというのに、流石は『帝国の闇』といったところか。

「正確にはエーデルスの双子に助力した。皇太子、お前はもうでもいい」

「……先程から思っていましたけれど、なんだか失礼な人ですね」

皇太子が呆れ顔で肩を竦める。

男が語ったセリフが気になったのは俺だけじゃなくディランも同じらしく、互いに顔を見合わせ
て瞬いた。

「俺らを助けに来たっのか？ 『帝国の闇』がなんだって俺らを」

『帝国の闇』という通称を口にした途端、男は何やら不満そうに目を細めた。

「……ローズ・シュタインだ。シュタインと呼べ」

聞き覚えのある名前に息を呑む。

それは皇太子も同様で、皇太子はお得意の澄まし顔を掻き消して驚愕の表情を浮かべた。

「シュタインとは、あのシュタイン伯爵ですか……!?」

シュタイン伯爵といえば、無名の末端貴族から成り上がったやり手の伯爵だ。

基本的に北部以外とは鎖国状態である、あの大公家とも繋がりがある実力派の貴族だと聞く。

そんなシュタイン伯爵の正体が、帝國中を恐怖に陥れたあの暗殺者だと？

俺達が驚いたのを見て、『帝国の闇』は息を吐いた。

「詳細を語れば長くなる。とにかく俺のことはシュタインと呼べ。その気色悪い通称ではなく」

そう語る『帝国の闇』……もといシュタインの顔は見るからに面倒くさそうだ。

シュタインは窓の外からまだ聞こえてくる聖者への歓声を鬱陶しげに一瞥すると、俺とディラン
に向き直って淡々と語り出した。

「兄を守れと、フェリアルから依頼された。故に俺はここへ来た」

暗殺者の口からチビの名を聞くととは思わず息を呑む。

固まる俺とは裏腹に、なぜかディランは剣呑な表情でシュタインを睨み付けた。

「またフェリに手を出したのか？」

また、という言葉が気になって首を傾げる。

俺と皇太子の訝しげな顔を見て、ディランはシュタインを指さした。

「フェリが襲われた例の件、犯人はこの男だ。俺はこの男の仲間に刺された」

「あァ!? なんだって!?」

その言葉によって、シュタインの印象は関わりのない暗殺者から家族かたきの仇までダダ下がりする。

「ディランとチビを傷付けやがったのはデメエか！」

一気に湧き上がった衝動に任せて拳を振りかざす。

手加減など一切せず、ぶっ殺してやるという気概で殴りかかったが、シュタインはあっさりと俺
の拳を避けやがった。

気に食わないことこの上ないが、流石は帝国を恐怖に陥れた伝説の暗殺者だ。

「……落ち着け。その件については申し訳なく思っている」

無表情のままサラッと謝罪したシュタインに虚を突かれて、思わず怒りの衝動がふっと収まった。別に許す気なんてさらさらないが、それはそれとしてこうもあっさり謝られると調子が狂う。振り上げた拳のやり場に戸惑っていると、ふと近付いてきた皇太子に肩をポンと叩かれた。「ガイゼル、ひとまず落ち着きましょう。どうせやり合ったところで勝てませんし」
「ぐっ……」

断言されたことに苛立ちが湧いたが、この男に勝つイメージが湧かないのは事実だ。拳を下ろして後退すると、シュタインに強い警戒心を向ける俺とディランの代わりに皇太子が口を開いた。

「伯爵……と呼ぶのも違和感がありますが。伯爵、知っていることを全て説明していただけますか？ フェリとディランの一件や、貴方と聖者の関係について」

皇太子に尋ねられると、シュタインはしばらく面倒くさそうな顔をして黙り込み、やがて観念したように答えた。

「……長話は苦手なのだが」

「いいから説明しやがれ」

催促すると、シュタインはいかにも面倒くさそうな顔はそのままに渋々語り始めた。

チビを襲う発端となった聖者との出会いから、今日こうして学園に現れた経緯まで。

チビが聖者の情報を探るために魔塔へ行ったという話に至る時には、頭がズキズキと痛みを訴えていた。

「チビのやつ、俺らになんの報告もしねえでちょこまか動きすぎだろ」

そもそもこの男に殺されかけたという話の詳細すら、チビの口からまだ聞いていないのに。

自分を殺そうとした奴と仲良くなつて、さらには外部の人間を決して懐に入れないとして有名な魔塔から歓迎されて、難なく出入りの許可を貰ったって？

昔から規格外というか、周りの見ていないところで色々動き回るチビだが、今回は度合いが違う。

いくらなんでも限度ってモンがあるだろ。

「魔塔は信用出来るのか？ フェリに危害を加える可能性は」

ディランが難しい顔で呟く。それに対して皇太子が微笑んだ。

「その点は問題ないかと。魔塔は独立的なだけで争いは好みません。公爵令息に害を与えるなど、帝国に喧嘩を売るような真似はしませんよ」

「まあ仮に何かあっても、どうせチビの傍にはシモンが居るからな。平気だろ」

俺も続けて言うと、ディランはほっと息を吐いて安堵の表情を浮かべた。

魔塔は信用出来ないが、シモンの実力は信頼出来る。気難しいディランがすぐに安堵したのはシモンの存在が大きいはずだ。

「……話は済んだか？ 本題に移りたいのだが」

ようやく平穏が戻り始めていた空気に亀裂が走る。

早くも好感度が地の底であるシュタインに、いかにもお前を嫌っていますという表情を向けるが、